

「X ば X ほど Y」構文のカテゴリー構造

－構文文法論の観点から－

1. はじめに

本稿は、「駅に近ければ近いほど、家賃が高くなる。」の様な「X ば X ほど Y」¹といった形式の表現²について考察したものである。「X ば X ほど Y」は、一般的なイディオムと共通する特性³を持つ一方、一般的なイディオムとは異なる特性⁴も持っている。そこで、先行研究 Fillmore (1989)、Okamoto (1993)、Okamoto (1994)、野呂(2008)らと同様、本稿では構文文法理論の立場に立ち「X ば X ほど Y」を構文とみなす。そして、従属節「X ば X ほど」の意味的特徴に関しては野呂(2008)の提案⁵を踏襲した上で、主節述部 Y に置かれる要素に焦点を当て、主節述語に動詞が生起した場合の「X ば X ほど Y」構文の意味的特性を記述する⁶。そして、「X ば X ほど Y」構文の意味的特性を抽出し、カテゴリー化という認知言語学の概念を用いて、それを構文スキーマと捉える。その上で、「X ば X ほど Y」構文におけるプロトタイプと周辺事例からなるカテゴリー構造を明らかにする。

2. 主節述語 Y が「動詞」である「X ば X ほど Y」構文の意味的特性

文法的アスペクトと語彙的アスペクトの観点で分類した動詞別に、主節述語が「動詞」である当該構文の意味的特性を考察する。文法的アスペクトの観点からは、「普通形⁷」と「ていく/てくる形」に、語彙的アスペクトの観点からは、次のように、下位分類を含め 9 つのクラスに分類する⁸。

A 動作動詞	A1 継続動詞	A1.1 主体動作動詞
		A1.2 主体動作・対象変化動詞
		A1.3 主体変化動詞
	A2 瞬間動詞	A2.1 主体動作動詞
		A2.2 主体動作・対象変化動詞
		A2.3 主体変化動詞
B 内的情態動詞	B1 感情動詞・感覚動詞	
	B2 思考動詞・知覚動詞	
C 状態動詞		

そこでは、従属節 X に生起する動詞と、主節において変化が生じる主語、目的語、修飾語、動詞との関係が明らかとなり⁹、当該構文の意味的特性を次のようにまとめた。

- (i)『従属節で示された事態の程度・量・回数』の段階的变化に比例して、『主節において変化するもの』が段階的に変化する。
- (ii)『主節において段階的に変化するもの』は、「普通形/ていく/てくる形」共に、動詞クラスに応じた「主節の動詞の程度/量/回数」及び「主節の主語/目的語/修飾語の程度/量」となる。「ていく/てくる形」の場合は、「変化の進展」が明示的表記されているにすぎない。
- (iii)主節述部 Y に関しては、動詞クラス及び「普通形/ていく/てくる形」といった形式による生起制限はない。
- (iv)主節の動詞自体が段階的な変化の意味を持たない場合でも、『主節の事態の程度/量/回数』が段階的に変化するという意味を持つ。

これより、当該構文における主節の段階的变化という意味は、主節の述部自体の意味から得られるというよりもむしろ、「X ば X ほど Y」という構文全体から導かれていることがわかる。

3. 「X ば X ほど Y」の構文の意味的特性とそのカテゴリー構造

さらに、カテゴリー化の概念に基づき、上記の意味的特性(i)~(iv)を構文スキーマと捉え、当該構文の各事例間のネットワーク、つまりカテゴリー構造を次のように提案する（図 1 参照）。

まずは、主節述部 Y に**状態変化述語**（A1.2, A1.3 の普通形、ていく/てくる形）が生起する事例について考えたい。これは、主節に関する動詞の程度・量の段階的变化を表し、かつ主節の述語自体が段階性のある状態変化の意味を持ち、最も構文スキーマと合致している。ゆえに、これをプロトタイプ事例とみなす。

次に、**状態述語**（B1 / C の普通形）が生起する事例であるが、これは主節に関する動詞・修飾語の程度・量の段階的变化を表している。とはいえ、主節の述語自体が段階的な変化の意味を持たないため、プロトタイプから逸脱している。ゆえに、これは周辺事例である

とみなす。

そして、**瞬間的变化述語**（A2.2 / A 2.3 の普通形）が生起する事例は、主節に関する動詞の回数、主語・目的語・修飾語の程度・量の段階的变化を表している。しかしながら、主節の述語自体が変化の意味は持っているが、段階性がない。ゆえに、これもプロトタイプから逸脱しており、周辺事例である。

最後に、**動作述語**および**心的活動述語**（A1.1 / A2.1 / B2 の普通形）が生起する事例はどうだろうか。これは、主節に関する動詞の回数、主語・目的語・修飾語の程度・量の段階的变化を表している。ただし、主節の述語自体が段階的变化の意味を持たない点で、プロトタイプから逸脱しており、これも周辺事例といえる。

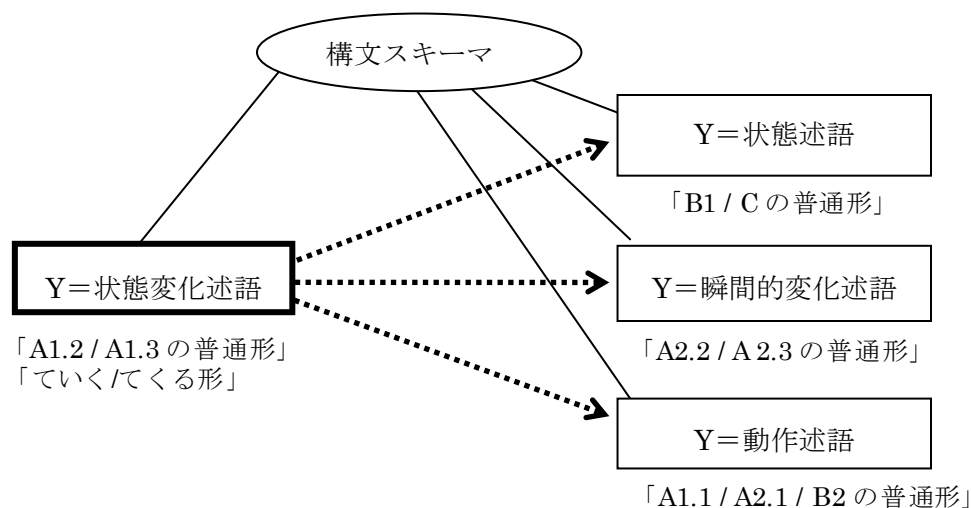


図 1

このように、当該構文は、主節述部 Y に状態变化述語が生起する事例とそれ以外の述語が生起する各々の事例が、プロトタイプと周辺事例という関係を成していることが明らかとなった。これにより、「X ば X ほど Y」構文は、プロトタイプ事例を中心とし、そこから周辺事例へと広がっていく放射状カテゴリーを形成する』ということが示された。

Appendix 1

	修飾語の 程度・量	主語の 程度・量	目的語の 程度・量	(主体に関する) 動詞の程度・量	(対象に関する) 動詞の程度・量	動詞の 回数
A1.1	○	○	○			○
A1.2					○	
A1.3				○		
A2.1	○	○	○			○
A2.2	○		○			○
A2.3	○	○				○
B1				○		
B2	○		○			
C	○			○	○	

主要参考文献

- Fillmore, C.J.(1989)「生成構造文法による日本語の分析一試案」『日本語学の新展開』,pp.11-28, くろしお出版
- Fillmore, C.J., Kay, P. and O'Connor, M.C. (1988) “Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone,” *Language* 64, pp.501-538.
- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- Okamoto, Shigeko. (1993)“Idiomatic Conditionals in Japanese,” *Japanese/Korean Linguistics* 2. Stanford: Center for the Study of Language and Information, pp. 68-81.
- Okamoto, Shigeko (1994)“Argumentative Verbal Repetitive Constructions in Japanese,” *Cognitive Linguistics* 5(4), pp.381-404
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3 第 5 部アスペクト 第 6 部テンス 第 7 部肯否』くろしお出版

日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
野呂健一(2008)「動詞の反復表現「V に V」「V だけ V」「V ば V ほど」について」『日本語
学会 2008 年度春季大会予稿集』, pp.143-150.

参考資料

泉原省二(2007)『日本語類義語表現使い分け辞典』, 研究社
グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお出版
白川博之監修(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, スリーエーネ
ットワーク
独立行政法人国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
水谷修監修(2001)『日本語イディオム用例辞典』, 朝日出版社

-
- ¹ 従属節が「X ば X ほど」、主節が「Y」、「ば」は順接条件を表す接続助詞、「ほど」は程度を表す副助詞である。
- ² 本稿では、石居(2008)に倣い、この表現を日本語の比較相関構文と呼ぶ。
- ³ 意味的には、つねに「一方で表された事柄の程度が変化するにつれて、もう一方の程度も変化する」という一定の意味を持ち、統語的には、従属節において間に他の語句を挿入することができず、結びつきが固定している。
- ⁴ イディオムは具体的な語の組み合わせが完全に固定されているのに対し、当該構文は、X と Y の部分が変数としてある程度自由に入れ替えることができ、完全な固定表現として捉えることができない。
- ⁵ 「X₁ ば X₂ ほど」の構文としての意味:『主節の事態の程度・量が増加することを前提とした、程度・量・回数の変化』
- ⁶ 本稿の用例は、断り書きがない限り「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から採取したものである。
- ⁷ アスペクトに関連する補助動詞が付加していない形
- ⁸ 本稿での動詞クラスは、工藤(1995)及び日本語記述文法学会(2007)による分類を基に、再分類したものである。
- ⁹ 詳細については、Appendix 1 参照